

南湖耕耘区・覆砂区におけるセタシジミ種苗放流結果と放流後の生息状況

石崎 大介・幡野 真隆

1. 研究目的

南湖はかつてセタシジミ漁業が盛んであったが、砂地の減少や水草の繁茂などにより現在ではほとんどセタシジミ漁業が行われていない。そこで、県では湖底耕耘や覆砂による漁場の再生を行っており、あわせてセタシジミのD型仔貝の種苗放流を実施している。放流効果を検証するため生息状況を調査した。

2. 研究方法

橋本・井戸本（1996）※の方法にしたがい、琵琶湖北湖で採捕した親貝を用いて、D型仔貝を生産した。生産個体は2010年6月10日から9月15日に順次、船上からホースと鉄管を用いて水深約3mに放流した。放流場所は南湖の南北耕耘区（各60ha）、H21年度覆砂区（14ha）である（図1）。なお2009年は耕耘



図1 セタシジミ種苗の放流地点

区に約10億個体、H20年度覆砂区に約1億個体放流しており、また南北各耕耘区の南部には2006年から放流が行われている。

各放流地点とH20年度覆砂区において2011年1月6日にエクマンバージ採泥器により稚貝の生息状況を、1月25日に噴流式小型定量桁網（以下：桁網）により18mm以上のシジミの生息状況を調査した。エクマンバージで採捕（各点3回採捕）した個体は目合い250、

710、1000、2000μmの篩にかけた後、底質から選別して計数し、桁網で採捕した個体は殻長を計測して生息密度を求めた。

3. 研究結果

北耕耘区、南耕耘区、H21年度覆砂区に、それぞれ約5.1億、5億、1億個体を放流した。耕耘区には種苗を3ヶ所に放流した。

エクマンバージによる調査で北耕耘区北部と南部、覆砂区で殻長0.35～1mm（篩の目合いから計算した殻長）のシジミが高い密度で生息していた（図2）。北耕耘区の北部や覆砂区は砂地であることから、覆砂が稚貝の生息環境改善に効果があることが示唆される。桁網での調査において南耕耘区の南部で5.5個体/m²という高い密度で18mm以上のシジミが生息していた（表1）。これは2010年の北湖主要漁場の平均生息密度（1.67個体/m²）より高く、漁業の再開が期待される。

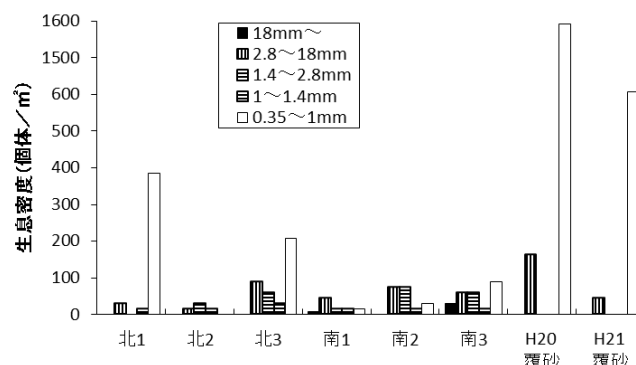


図2 シジミの生息密度（エクマンバージによる採集）

表1 殻長18mm以上のシジミの生息密度

	北1	北2	北3	南1	南2	南3	H20 覆砂	H21 覆砂
生息密度 (個体/m ²)	0.0	0.1	0.8	0.6	0.3	5.5	0.1	0.1

4. 研究成果

調査結果を資源回復計画推進のための漁業者検討会等で発表した。

※滋賀県水産試験場研究報告 第45号